

杉並一般労働組合 スタジオ・イースター分会

労働組合でのたたかいを通して アニメ業界を良くしたい

ジャーナリスト 藤田 和恵



追い出し部屋、労災認定なのに 減給、長時間労働・パワハラで 病気に

同僚たちが何台ものパソコンに向かい、締め切りに追われている。そのすぐ横に、簡素なつい立で仕切られた15坪ほどのスペース。隣の喧騒とは打って変わって、窓際に机と椅子が置かれているだけの、まるで見せしめのような孤立した光景は、リストラや退職強要が目的といわれる「追い出し部屋」の典型にもみえる。

人気テレビアニメ「名探偵コナン」などの背景画の制作を手がける「スタジオ・イースター」（東京都杉並区）で、コンピューターシステムなどを維持、管理する部門の責任者だった山田徹さん（48歳）がこのスペースでの勤務を命じられたのは、2011年6月のことだ。退職する社員に有給休暇を取るようアドバイスしたところ、なぜか、始末書の提出と降格を命じられ、その後も一方的な配置転換や減給に遭い、挙句、「追い出し部屋」行きを命じられたという。

そこではほとんどの業務を奪われ、唯一の“仕事”は週に一度、「待機」と書き入れた報告書を提出すること。前職より同様の仕事が専門で、何台ものコンピューターや幾重にも交差した配線に囲まれて働くのが当たり前だった山田さんにとって、筆立てひとつない机に向かう毎日は、ひとき

わ惨めで、心もとないことでもあった。

「放送日に追われて作品を作る社員たちが存分に力を発揮できるよう、裏方として支える仕事はやりがいがありました。現在のシステム環境は私が中心となって整備してきたという自負もあります。それなのに、納得できない理由で降格、減給され、繰り返し、退職を勧められ、気が変になりそうでした」（山田さん）

同社での仕事が原因で頸椎症（労災認定済み）となった猪鹿倉智幸さんは（35歳）これからも一生、首や肩、腕の痺れや痛みと付き合っていかななくてはならないという。「医者からは『悪化はしても、治ることはない』と言われました。酷い時は歩くことも、座ることもつらくなることもあります」。

もともと、コンピューターグラフィック（CG）にかかわる仕事に就いていたところ、アニメ業界でも急速にCGが取り入れられつつあったため、実績を積もうと同社に移った。ところが、実際の業務は大量の原画やレイアウト用紙をひたすらスキャナーで読み込むという過酷な肉体労働。読み込みが終わらないと、CG制作にも取り掛かれないため、無理をしてでも作業スピードを上げざるを得ない。重さ2、3キロはあるスキャナーのふたを連日、上げ下げし続けるうちに、次第に痺れや痛みを感じるようになった。

頸椎症を発症したのは、入社からわずか数カ



スタジオ・イースター分会の山田徹さん

月。医師から2週間休むように言われたと上司に伝えると、「では、『2週間で復帰できない場合は退職します』という紙にサインをしてください」と返されたという。何とか復帰はしたものの、それまでのような長時間の作業はできなくなった。すると今度は、「残業できないなら辞めたほうがいい」「会社としても期待はずれで損害」と言われ、月給を28万円から24万円に減額された。

猪鹿倉さんは「残業代も出ないのに、痛みを我慢して徹夜までして働いたのに。それで、頸椎症になったのに。この悔しさは忘れることができません」と訴える。

台湾出身の陳盈如さん(25歳)は子どものころ、日本のテレビアニメ「ドラゴンボール」や「セーラームーン」に夢中になった。アニメーターになりたくて来日、専門学校を卒業し、念願かなって同社に入社したが、夢と現実とのギャップは想像を超えていた。

最初の2ヵ月間は「研修生」だといわれ、給料は1日2000円。正社員になった後も連日、長時間のサービス残業で、終電で帰ろうとすると、上司から「なぜ、そんなに早く帰るのか」とにらまれた。次第に体調を崩し、仕事の効率が落ちてノルマがこなせなくなると、「決められた場所でおしっこができない犬は叱らないといけない」と人権侵害まがいの叱責をされ反省文を書かされた。残業代の未払いについては「好きでアニメの仕事をしてるんだから、お金がほしいなら、コンビニでアルバイトをしたほうがいい」と開き直られたという。



原告の山田さんが配転命令により2011年6月27日以降配置された第2スタジオ2階、座るよう指示された場所(東京地裁に提出された資料より)

入社1年後にはストレス性十二指腸潰瘍かいようと不眠症、睡眠障害と診断された。病気のせいで、その後は工作中、どんなに気を張っていても気がつくと、眠ってしまっていることがある。周囲にはただの居眠りに見えるのか、同僚らの視線は冷たく、トイレで深呼吸をする時だけ、生きた心地がしたという。しかし、会社側は陳さんにさらなる追い討ちをかけてきた。彼女の給与明細には、「離席、居眠り」との項目があり、例えば、2012年10月分では1万3006円、同年11月分では1万5007円が差し引かれている。トイレの際の離席などに対する罰金と思われるが、法的には到底、許されない仕打ちだ(現在は改善)。

陳さんは「新人なので仕事は遅かったかもしれませんが、だんだん早くなってきていましたし、何より一生懸命頑張りました。でも、上司からは何度も自分から会社を辞めるよう迫られました」と打ち明ける。

★ アニメへの情熱を利用し、下請・労働者にしわ寄せ、いびつな構造で空洞化の懸念も

日本アニメはスタジオジブリ作品などに代表されるように、世界から高い評価を受けてきた。一方で、働き手の労働条件は以前から劣悪だったとされる。最賃法違反に残業代や割増賃金の未払い、一方的な賃下げ、パワハラが横行。「アニメ業界に残業代という考え方はない」との暴言も決して珍しくない。スタジオ・イースターの現状は氷山の一角にすぎないのだ。



東京地裁提訴時の記者会見（2012年5月17日）

また、山田さんらはいずれも正社員だが、業界の主な雇用形態は個人事業主で、その実態は一層過酷だ。日本アニメーター・演出協会（JAniCA）が実施した調査では、動画アニメーターの5割が年収100万円未満、社会保障では厚生年金の加入者が全体の12.8%、雇用保険は10.6%にすぎないことが分かった。月の残業が「過労死ライン」とされる80時間を超えることはざらで、体調を崩せば、即退職を迫られるため、業界の離職率は8割にも上るとも言われる。

アニメ制作の現場はなぜ、ここまでずさんでしまったのか。

「手塚さんのせい」——。

関係者の中には、テレビアニメの生みの親とも言える漫画家・手塚治虫さんの「責任」を指摘する声が少ない。1960年代、手塚さんが自身の名作「鉄腕アトム」のテレビアニメ化を手がけた時、到底採算が取れない安価な受注額で引き受けたことが、制作費が低水準にとどまるきっかけとなったというのだ。確かに、テレビ局のアニメ制作の発注額は同じ30分の実写番組と比べて7、8割。長引く不況の影響もあり、当時から現在に至るまで、下がることはあっても上がることはなかったという。

東映出身で、テレビアニメの黎明期を間近で見てきた映演労連フリーユニオンの高橋邦夫委員長は「手塚さんをはじめ、当時の関係者は皆、なんとしてもテレビアニメをつくりたい、ディズニーに続くん다는夢を持っていました。彼らの情熱がテレビ局側にいいように利用され、現在にい

たってしまった面はあるかもしれません」とみる。

また、アニメ制作はテレビ局が「動画」や「背景」、「撮影」の作業ごとに下請けや二次請けに発注するため、いわゆる「川下」にある下請け会社にさまざまなしわ寄せが集中する。安価な受注額で採算を取るためには、量をこなさなくてはならない上、「川上」の納期遅れの影響で、常に締め切り間際の仕事を抱えることになる。業界では川下にあたるスタジオ・イースターで、猪鹿倉さんが終日、スキャナーの読み取りに追われたのは、納期が迫った仕事大量に押し寄せたためだ。また、作品がヒットすれば、キャラクターの二次利用などで利益を得ることもあるが、恩恵にあずかれるのは著作権などを持つ原作者や出版社、テレビ局、せいぜい元請けの制作会社まで。二次請けより先では、赤字が続くだけだ。

さらに、アニメ業界では労働組合の組織化が難しいともいわれる。多くのアニメーターはよくも、悪くも「職人気質」。腕一本で勝負するといえ聞こえはいいが、協力しあって待遇改善を訴える発想とは無縁の価値観を持つ人も少なくない。

「好きな仕事をしてるんだから」——。陳さんが再三言われた、この言葉は業界では定番の「殺し文句」だ。そして、こうした発破^{ほっぱ}をかけるのは、劣悪な労働環境を生き残ってきた働き手でもある。しかし、彼らが生き残ることができたのは、ただ運がよかったからにすぎない。部下にしてみると、精神論や体験談だけで「私にできたんだから、あなたにもできるはず」と、労基法無視の働き方を強いられることほど始末が悪いものはない。

話は少しずれるが、こうした状況の下、最近は動画制作を中心に、中国やタイなどへの海外発注が進んでいる。作品テロップの大半を中国人名が占めることや、日本の昔の田園風景をと依頼しているのに、仕上がってきた背景画が日本の風情とはかけ離れたものだったといったトラブルも増えてきているという。

出発の時点より、いびつな構造を抱え込んでしまったアニメ業界。高橋委員長は「労組もない無法地帯で、このまま技術の空洞化が進めば、日本のアニメーターの力量や作品の質は落ちていくことになる」と懸念する。

★労働組合はブラック企業に立ち向かう貴重なツール

そうした中、スタジオ・イースターの山田さんと猪鹿倉さん、陳さんの3人は個人でも入れる労働組合「杉並一般労働組合」に加入。2012年5月、残業代不払いや退職強要などがあったとして、同社に約2700万円の支払いなどを求め、東京地裁に提訴した。労組不毛ともいえるアニメ業界では、こうした告発は極めて異例である。

山田さんは何か所もの弁護士事務所や法律相談会をめぐる中で、同労組を紹介されたという。当時の追い詰められた心境を「私は間違ったことは言ってない。なんで、こんな目に遭うのか。そんな一心でした」と振り返る。その上で、労組の意義について「私独りでは泣き寝入りするしかなかったと思います。一緒にたたかえる仲間がいるから、ここまでくることができたし、団体交渉や裁判の準備をする中で、仕事に対する自信を取り戻すこともできました。労働組合は、ブラック企業に対して弱い個人が立ち向かうための貴重なツールの一つだと思います。もっと多くの働き手に労組に入ってたたかうという手だてがあることを知ってもらいたい」と語る。

また、CGの技術を生かし、別業種の会社に勤めたことのある猪鹿倉さんにはアニメ業界の“異常さ”がよく分かるといい、今回の提訴の目的についてこう語る。「ここまで、労働者が人間扱われない世界は珍しいと思います。多くの会社が時代遅れ。このままでは、CGの技術を持つ人はだれもアニメ業界にいかなくなる。CGに携わる人の就職先として、アニメ業界が当たり前の健全な選択肢になってほしい」。

一方、陳さんは労組加入後、職場でだれからも



映演労連フリーユニオンの高橋邦夫委員長

あいさつを返されなくなった。「『おつかれさまでした』と言っても回りはシーン（としている）。会社に行くのがつらい」と言う。「でも、裁判ではあいまいな和解はしたくない。大好きなアニメのためにも、きちんと判決を出してもらいたい。会社からは法律なんて守っていたら、アニメ業界は成り立たないとも言われましたが、私はそれぞれが働きやすく、余裕をもって暮らしてける職場の方が絶対にいいアニメが作れると思うんです」。

1960年代、「太陽の王子 ホルスの大冒険」という劇場用アニメが公開された。日本を代表するアニメ監督、高畑勲^{いさお}さんや、スタジオジブリの創設者、宮崎駿^{はやお}さんらが東映動画（現在、東映アニメーション）時代に手がけた作品である。少年ホルスが村人らと一致団結して悪魔による圧政を終わらせるという物語だ。高畑さんも宮崎さんも東映動画労組の役員を務めたことがあるからか、労組関係者の中には、弱い立場の人々が連帯するというモチーフに労組活動を重ねる人もいる。啓発を兼ねて若い組合員らにこの映画を見せている労組もあるという。

世の中をよくしたいという使命感と、一人ではないという連帯感——。若かりしころの高畑さんや宮崎さんが発したメッセージを現代に引き継ぐことはできるのか。「労働組合でのたたかいを通してアニメ業界を少しでもよくしたい」と意気込む猪鹿倉さんと陳さん。山田さんが力強い口調で付け加えた。「それは、社会を変えることにもつながると思います」。